わたしたちの

ゼミへようこそ

1 授業は先生と生徒との対話で展開される
2 授業風景。生徒が卒業論文の進捗を報告
3 ゼミ旅行で訪れた京都にて、平安京の石碑巡り
4 石碑を頼りに京都の町を歩き、平安京を体感
5 出席者一同で集合写真

Vol. 47

中川ゼミ

中川ゼミでは、主に平安時代に成立したとされる中古文学を題材に、2年間をかけて卒業論文制作に取り組みます。3年次のうちは皆手探りの状態ですが、だんだんと各自が自身の見つけた課題に自負と熱意を持って取り組む姿が互いに伝わってくるようになります。中古文学にまつわること全般を研究対象にでき、かつ自身が設定した疑問に長い時間をかけて向き合えるという、関心に基づいた裁量度の高さが大きな特徴であり、魅力です。

自主性と興味関心を重んじるゼミで存分に探究する2年間　中古文学ゼミナール

栗山 美希（くりやま みき）
文学部人文社会学科国文学専攻4年／私立富士見高等学校（東京都）出身

中川照将先生の中古文学ゼミナール（以下、中古ゼミ）では、中古文学と呼ばれる主に平安時代の文学に関する研究を扱います。

一般的にゼミ活動の形式は大学や専攻、担当教員によって大きく異なりますが、私が所属する国文学専攻では、基本的に一人一つのテーマを決めて、各自で卒業論文を執筆します。その中でも中古ゼミでは、3年次の時点で自分の興味関心の方向性を定めて、2年間という比較的長い時間をかけて卒業論文を完成させていきます。3年次のうちはあらかじめ指定されたテーマの調査・発表をすることで練習を重ねて、4年次から各自の研究に取り組むゼミもありますが、自身の好奇心に思い切り向き合うことのできる中古ゼミの体制が、私にはよく合っていたと思います。

平安時代には、教科書で誰もが一度は読んだことがあろう『源氏物語』や『伊勢物語』『竹取物語』など、長い年月の中で多様な作品が生まれました。私たちのゼミは、そうした中古文学に関わる研究ならOKという門戸の広さが魅力であり、中古文学自体を研究対象にする学生もいれば、中古文学への興味を足掛かりに、平安時代の文化・風習や、マンガ、古い時代の写本や解説書などを題材にした研究に励む学生もいます。このように、ゼミでの学びの多くが私たちの興味関心と自主性に委ねられており、卒業までの2年間をかけて、本当にやりたいこと、知りたいことにじっくりと向き合うことのできるゼミなのです。

中古ゼミの3年次は、各自が興味のある作品や研究の方向性を模索するところから始まります。最初は文学研究の専門性の高さゆえに、右も左も分からないため、まずはこの作品のここが気になる、という糸口を見つけます。その後は、その糸口を少しずつほどくイメージで、作品や関連する論文を読んで疑問を解消しながら、さらに新たな疑問や興味を見つけていく作業を繰り返していきます。そ

の過程の中で、3年次が終わる頃には、卒業論文の執筆に立ち向かうための体力と知識の体系的な地盤が整い始め、具体的に卒業論文で明らかにしたいテーマも少しずつ見えてくるようになります。

とはいえ、作品や論文を読み解くにしても、卒業論文のテーマを探すにしても、やはり一筋縄ではいかず、担当の中川先生にはさまざまな形でお力添えをいただきました。研究方法や方針に関する助言はもちろんのこと、先生は、研究に携わる者としても人としても、私たち一人ひとりの個性や適性をよく見ていて、とても親身になってくださいます。良いところを見つけては褒めてくださり、一方でときには厳しいお言葉をいただくこともありますが、そうした個人対個人の深い関わり合いを通じて、人として成長するだけでなく、学生にとって未知の分野である「研究」に必要な真摯な姿勢を日々学んでいます。こうした先生と学生間の距離の近さは、少人数のゼミならではの特徴ではありますが、決して当たり前のことではありません。自身のこれまでの経験を振り返ると、このような機会を得られること自体がとても貴重なのだと実感します。

また、学生同士でも、互いの研究の進捗報告を聞く中で感じたことや自身の研究と重ねた上での気付きがあれば、意見やフィードバックを交わしています。ゼミ員の進捗報告の内容や、直接もらった意見から新たな発見につながることもあり、同じ「中古文学」を研究しているからこそのつながりを感じてワクワクする瞬間があります。中古ゼミの学生は、皆それぞれが自身の研究や課題に自負を持ち、粘り強く取り組む人たちだと私は考えています。そうした姿や、ゼミ員の興味深い研究から良い刺激をもらえることも、中古ゼミの魅力の一つです。

ゼミ活動がより充実したものとなっている理由の一つには、私たちの専攻・大学が、研究に必要なサポートが充実していることも挙げられます。大学図書館と、専攻ごとに設置されている研究室には、膨大な数の蔵書が保管されており、大学の最寄り駅の沿線上には国文学研究資料館もあります。国文学系統の論文はオンライン上で読めるものはあまり多くはなく、本来は文献を読むためにみずからさまざまな場所へ出向いたり、取り寄せたりする必要がありますが、そうした蔵書の豊富さや、文献の管理や私たちの手助けをしてくださる職員の方々に恵まれたこの環境のおかげで、より積極的に研究に打ち込むことができます。

私は卒業論文として、『伊勢物語』という作品について、鎌倉時代から江戸時代頃までに書かれた古い注釈書を用いながら、当時の人々から現代までどのような解釈が受け継がれてきたのかを調査しています。このテーマは、私が高校生の頃に漠然と抱いていた疑問がもとになっています。「古注釈」と呼ばれる古い時代の注釈書の世界は想像以上に奥が深く、古注釈を題材にした論文をごく最低限のみ理解できるようになるのでさえ約1年を要しました。それだけの長い時間と専門性を費やして古注釈や自身の疑問に向き合うという試みは、中古ゼミだからこそ実現できたことだと考えています。そして、やや難解ではありますが、かつては知らなかった古注釈という題材を通じて、当時の私の疑問の本質に向き合えていることがとても楽しく、また、3年次の初めはさっぱり分からなかった論文が少し理解できるようになってきたことに気付いたときは、それだけで大きな達成感に包まれました。中古ゼミでの2年間を通じて養われてきた、こうした根気強く興味の本質に迫ろうとする力と好奇心を育てていく姿勢は、今後もきっと私の支えになるだろうと思います。

Message!

平安文学を読むことで、なにがわかるのか？

このゼミでは、平安時代に作られた作品を中心に研究しています。平安時代の作品としては『源氏物語』や『枕草子』などが有名です。ゼミ生たちは、これらの作品がどのようにして作られ、何が描かれているのかについて日々考えています。このように説明すると「そもそも文学を研究することにどんな意義があるのか」と言われたりします。その答えはなかなか出ないのですが、ゼミ生たちの研究を見ていると、ふとその答えが見えてくるような気がします。たとえば、「マンガの男性キャラと女性キャラでは言葉遣いに違いがあるけれど、平安時代の物語に出てくる男性と女性でも言葉遣いの違いはあるのか？」とか。「『竹取物語（かぐや姫）』は中学の国語の教科書などで教材に使われている作品だが、そもそもいつから教科書に使われるようになったのか？」とか。このように、一言で「文学作品を読む」といっても、ほんの少し視点を変えてみるだけで、日本文化の歴史的変遷や現在注目されているジェンダーの問題などが浮かび上がってくるのです。

文学研究とは「文学」を研究するものですが、それはたまたま「文学」を通して社会の有り様を明らかにしようとしているだけです。それが「経済」であろうと「法律」であろうと、すべての学問が目的としているのはただ一つ。それは、社会のあらゆる問題を明らかにし、その研究結果を社会に還元することです。そんなことを意識しながら、今後もゼミ生たちと平安文学を一緒に研究していきたいと思っています。

文学部教授
中川 照将（なかがわ てるまさ）